

早めに気づけば治す方法もある

誤解の多い認知症。早期に気づけば怖い病気ではない

認知症と聞くと、突然大声を上げたり、暴力をふるったり、深夜に徘徊するなど、奇怪な行動を思い浮かべる人が多いようです。人間性が壊れていく、寝たきりになる、家族に大きな迷惑をかけるなど、かかる前から、怖い病気というイメージにおびえています。

しかし、これはとんでもない誤解です。暴力や徘徊といった症状は必ず起こるわけではなく、がんに例えれば、手の施しようがない末期がんのような状態と言えます。認知症の初期段階は、病気とは思えないほど穏やかな症状です。私はまず、このことを皆さんに知っていただきたいと思っています。

認知症とは、単なる老化現象ではなく、脳の障害により知的能力が低下する病気の総称です。ひとことで言えば、「もの忘れが続いて日常生活に支障をきたす状態」を指し、そんなにやっかいな病気ではないのです。

認知症の初期段階で障害を受けているのは、脳のほんの一部分だけです。日常生活のやりたいのことを、自分でやる能力は残っています。突然、自分一人では何もできなくなってしまうわけではありません。

例えば、ついさっき言われたことを忘れてたり、火を消し忘れてたり、電気をつけっぱなしにしたりもしますが、それは家族や周囲の人が気をつけてあげればよいことです。忘れてもいいようにメモを渡したり、火の始末をしてあげるなど、歩行の不自由な人に杖を貸すように、家族がちょっとした「記憶の杖」になってあげればよいのです。こうした、家族の正しい理解とよい対応は、症状の悪化を防ぐうえでも非常に大切です。これについてはPART4で詳しく述べます。

また、「認知症は治らない」というのも誤解です。認知症を引き起こす原因はさまざまですが、早期に発見して治療すれば、治る可能性の高い症状もあります。認知症の半数を占めるアルツハイマー型には治療薬もあり、早い段階で服用すれば、進行を食い止めることもできます。